



日本キリスト教団  
**三軒茶屋教会**  
<http://sanchurch.jp/>

# 三軒茶屋 教会通り

〒154-0024  
 東京都世田谷区三軒茶屋1-31-5  
 TEL/FAX: 03-3418-4933  
 発行: 三軒茶屋教会 広報部

第56号 2018年2月発行

「父なる神はわかる。子なるキリストもわかる。でも、聖霊についてはよくわからない」。教会生活が長いキリスト者からも聞かれる言葉だ。主イエスは「神は霊である」(ヨハネ4:24)と教えておられる。その神を信じているが、聖霊についてはよくわからないとは、その背後で何が起こっているのだろうか。まず考えられるのは、「霊」という文字がもたらす直感的な印象だ。「霊」という漢字は、「雨」と「巫」から成る。雨のように天から降ってくる死者が語る言葉を受け止めて、生きていく人間に語り直している「巫」、霊媒師のさまを現している。青森県は恐山の「イタコ」が文字としての「霊」なのだ。つまり、漢字での「霊」は、死者の領域からの言葉や意志を表している。

では「聖」はどうだろう。「聖」という文字は、和語では「ひじり」と読み、もともとは農耕を中心とする生活共同体を秩序付ける暦を取り決めるために地域毎にたてられた人「ひじりびと」を意味していた。今日、「聖」は不思議な活力や開運をもたらす「パワースポット」に漂うような、清らかで神聖な見えざる雰囲気や力と言うと通じやすい。一方、聖書での「聖なる」とは、取り分けられたものという意味がある。似たようなものがある中で、神

## 我は聖霊を信ず

### — 教会が教会であるために —

牧師 伊藤英志

りが起こると信じられている。つまり、日本古来の理解では、「聖」と「霊」とは互いに相容れない対極的な位置付けとなる。ここから生じる感覚のズレが「聖霊についてはよくわからない」という現実を教会においても引き起こしている。この感覚は誰かが教えたものでもない。自然と伝わり、誰にでも強く固着していく文化の浸透力による。したがって、使徒信条にある「我は聖霊を信ず」とは、「生」と「死」文化とは全く異なる別次元の領域を指向する信仰を表している。聖霊を信じる我とは、十字架と復活の主イエスが教えた聖なる公同教会、聖徒の交わり、罪の赦し、身体のみがえり、永遠の生命を信じようとする信仰に立ち戻ろうとする。文化の力や人間業では実現不可能な神の御業をこそ信じる。そうした「我」が召し集められ群れとなるのがキリストの体なる教会である。聖霊を信じる確かな信仰があつてこそ、その群れは教会であり続ける生き生きとした聖なる力に満ちている教会であり続けるのだ。

